

が頻回となったため入院治療は不相当と判断し、同年 9 月退院した。

状況依存的で数時間続く発作の性質と、不安であることを訴えつつも生活行動が制限されていないことから、パニック障害は否定され、自己愛性人格障害を主診断とし、それに基づく対人的葛藤の際に生じる不安から症状が出現していると考え、I 軸を特定不能の不安障害とした。

自己愛性人格障害に合併する精神障害はうつ病、物質使用、身体表現性障害、摂食障害、妄想性障害など様々である。なかでも最も多いのはうつ病性障害であり、大うつ病性障害、気分変調性障害が 42 - 50 % に合併する。続いて物質使用による障害で 24 - 50 % である。逆にパニック障害を含めた不安障害に自己愛性人格障害が合併するのは 0 - 5 % と稀であった (Ronningstam, 1996)。

上記の報告と比較すると、本症例は典型的ではなかった。しかし入院中の患者の様子から判断すれば、症状は確かに対人的葛藤の際に生じた不安に基づくものであり、その根本的原因はやはり自己愛性人格障害であろう。過剰な自己愛が本症例の本態であると考えることにより、病態の理解が容易になった。

#### 4 入院を契機に自己臭症状を呈したうつ病の 1 例

佐伯 英俊・布川 綾子・沢村 一司

村山 賢一・染矢 俊幸\*

新潟大学医学部附属病院精神科

新潟大学大学院医歯学総合研究科

精神医学分野\*

症例は 58 歳男性。病前性格に強迫傾向、敏感傾向を認めた。X 年 6 月に仕事内容が変わり、仕事への不安が出現した。抑うつ気分が出現し、X + 1 年 5 月大うつ病性障害の診断で当科入院した。入院後すぐ自己臭の訴えが出現し、その後妻から患者が水俣病であるとの情報が入ったが、患者は自らの水俣病の認定を他人に知られることに、不安を感じていたとのことであった。第 60 病日頃、抑うつ気分の増加に伴い自己臭の訴えおよび、そ

れに対する自責感が増加し自傷行為に至った。クロミプラミン点滴に反応し、第 100 病日頃には抑うつ気分は軽減し、スルピリドを併用した所、自己臭の訴えも減少したが消失はしなかった。しかし、外泊時に家族と過ごしていた時には自己臭の訴えは認められなかった。後にスルピリドを再処方すると自己臭の訴えは消失した。気力低下が続いていた為、リチウムを併用した所、気力が上向きとなり退院した。

本症例の自己臭症状成立の背景であるが、堀越らにより、うつ病者の自己臭発生には対人恐怖構造、敏感性格構造、うつ病構造、強迫性格傾向の関与が指摘されている。本症例の敏感性格、強迫という性格傾向を考えると、本症例はうつ病に伴い自己臭を出しやすい傾向にあると考えられた。さらに、堀野らは中年期の敗北体験や羞恥体験がうつ病者の自己臭発生に関与する可能性を指摘しており、本症例でも職業上の敗北体験が認められた。加えて、本症例は入院時ガスが沢山出たというエピソードを認めた。以上から本症例の自己臭症状成立の背景として、本症例の性格傾向、職業上の敗北体験、入院時にガスが沢山出たエピソードの 3 点が考えられた。

本症例の自己臭症状の特徴は、入院を契機として自己臭を呈したこと、および自己臭の体験野が、家族に対しては認められず、「中間的な関係の人々」を中心としていた点に認められた。宮本らは対人恐怖の 1 病型としての自己臭恐怖の体験野が、「中間的な関係の人々」か、それ以遠の人々に広がるが、うつ病の妄想の体験野は、家族と居る時に生じやすいと指摘しており、これに従うと、本症例の自己臭症状の体験野は対人恐怖の 1 病型の自己臭恐怖に類似すると考えられた。妻の話し等から、患者にとって水俣病の認定は、世間に対して隠すべき羞恥体験であると推測された。また、入院時にガスが沢山出たというエピソードが自己臭症状成立の鍵となる体験と考えられた。すなわち、入院を契機として自己臭症状が出現した背景としては、患者が水俣病の認定を世間に対し隠すべき体験と捉えていた事、および入院時にガスが沢山出たというエピソードが考えられた。自己臭

の体験野が中間的な関係の人々に出現し、家族に出現しなかった理由を推測すれば、家族は自身の水俣病を隠すべき世間ではなかったためと考えられた。

## 5 顕著な解体症状にバルプロ酸が有効であった分裂感情障害の一例

奈良 康・小泉暢大栄・本田 潤  
高橋 誠・村竹 辰之・染矢 俊幸\*  
新潟大学医学部附属病院精神科  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
精神医学分野\*

分裂感情障害の治療は、抗躁薬、抗うつ薬、抗精神病薬を症状に応じて単剤又は、併用するのが一般的である。抑うつ型は双極型に比べ治療手段は少なく、双極型で有効な carbamazepine (CBZ) や valproate (VPA) の効果は低いとされる。今回我々は抑うつ型の分裂感情障害で出現した顕著な解体症状に対し VPA が有効であった一症例を経験したのでここに報告する。

症例は 60 歳の女性。X 年 2 月より、抑うつ症状、貧困・虚無妄想が出現し他医にて薬物療法を受けたが効果なく、5 月に当科入院となった。入院当初、精神病像を伴う大うつ病と診断され、高用量の paroxetine (60mg) により、抑うつ症状、妄想とも改善した。しかし、8 月中旬より多弁傾向、過干渉を伴う解体症状が出現し、さらに、抑うつ症状と妄想も再燃した。この解体症状に対して risperidone は無効であった。Risperidone を中止し、paroxetine のみで加療継続した結果、抑うつ症状、妄想、解体症状は改善した。11 月に再度、8 月のエピソードと同様の解体症状が生じたとき、VPA はこの解体症状を軽減し、増悪・寛解を繰り返す抑うつ症状と妄想を安定させることができた。

本症例の、多弁傾向で始まり、過干渉、感情の不安定を伴うエピソードには気分高揚や自我の肥大を伴わない為、これは躁病エピソードではなく、解体エピソードと考えるのが適切である。今回のエピソード中、精神分裂病の活動期又は、残遺期

の症状が一貫して存在し、大部分の期間で大うつ病のエピソードも存在する。この為、分裂感情障害抑うつ型と診断した。本症例では、寛解期に突然解体症状が出現し、抑うつ症状と妄想の再燃につながるという特徴が見られた。

分裂感情障害の治療方針は先述の如く、抗躁薬、抗うつ薬、抗精神病薬が症状に応じて単剤又は、併用で用いられる。双極型では lithium が有効であり、単剤、又は抗精神病薬と併用される。抗躁作用のある CBZ や VPA も多く用いられる。最近特に、VPA の使用頻度が高く、VPA の有用性を示す文献も多い。抑うつ型では、抗うつ薬、抗精神病薬を単剤又は、併用することが一般的とされるが、両者の併用の効果に対しては疑問視する説が多く、抗うつ薬単剤にも劣ると述べる研究報告もある。Lithium や VPA の効果は少なく、維持療法としても有効性は低いとされる。従来、VPA は双極型に有効であるが、本症例の解体症状にも有効であった。このことは、VPA が分裂感情障害の躁病エピソードだけでなく、抑うつ型の分裂感情障害にも有効であることを示唆しており、VPA は分裂感情障害そのものの治療に有効である可能性がある。

## 6 著明な脳室拡大を伴う精神分裂病の 1 例

宮本 忍・細木 俊宏・村竹 辰之  
塩入 俊樹\*・染矢 俊幸\*  
新潟大学医学部附属病院精神科  
新潟大学大学院医歯学総合研究科  
精神医学分野\*

著明な脳室拡大を伴う精神分裂病の症例を経験したので報告する。

【症例】35 歳、女性

【主訴】感情の不安定性、幻聴

【家族歴・既往歴】精神科的遺伝負因、周産期障害や脳炎、頭部外傷などの中枢神経疾患の既往なし。

【現病歴】高校卒業ごろより被注察感が出現し、X-2 年、34 歳時から注察妄想、考想伝播、思考化声、幻聴が出現。X-1 年 5 月、精神分裂病と